

湯山城



この城は「豊後国志」にある「湯山^{さい}寨」のことで、

奴留湯^{ぬるゆ}氏の山城であった。城は由布盆地の南側に位置し、西石松の背後（南）になる。山頂（字湯山）の標高は、760m。ここは城ヶ岳（1168m）の稜線が盆地に延びるその先端にあたり、東南が屋根続きとなっているが、（山頂より、約28m程低い）、東西は深い谷が入り込み、北側と共に絶壁となっている。山頂付近は自然林に覆われ、道もなく登頂しにくく、未踏査である。近所の人もこの山頂には用がなく、人工的な施設の有無など、聞き取り調査もできない所である。この湯山城北

側の山の下、標高520mあたりはやや広い台地となっており、そこを通称「殿屋敷」（字亀井）と呼ぶ。この殿屋敷の山つきからは、豊富な水が湧出しており、その水でその下流の東石松・西石松・田中市一体の約320世帯の生活用水を賄っている。この余り水は、その下の田や池の水にも利用されている。ここは、現在「石松湯山専用水道組合」の水槽タンクが設置され、由布院の大切な水源地の一つである。おそらくこの殿屋敷一带に、奴留湯氏の平常の居館があったものと思われる。背後の湯山城を詰めの城とする根小屋が、こちらあたりにあったものと考えられる。

史料によれば、天正14年（1586年）12月島津軍は船ヶ尾城（天神山駅の対岸）・松ヶ尾城（小野屋駅から小挾間川上流）を攻め、落城させる。さらに権現岳城（庄内町城山）を攻めるが、落城出来ず挟間鎮秀と人質を交わし和睦する。由布院では、キリスト教会等が破壊された。しかし、由布院衆は、湯山城に久保治部少輔・植田宮内少輔・奴留湯氏とその配下の一族、郎党、一般農民が立て籠もった。藤ヶ城に右田、針、厚、溝口、荒木氏等が立て籠もった。そして、12月～1月にかけて由布院衆は保塁を出て盛んに夜襲をかけて島津軍を悩ました。

また、同地からは盆地が一望に見え、水源を確保・支配し、その水源の豊富な水の流れる下流一帯を納めるのに、最も適した地であったと考えられる。